

セクシャルマイノリティの子どもたちと向き合う

—— 個性と多様性を尊重するオランダに学ぶ ——

前ロッテルダム日本人学校 教諭

東京学芸大学附属大泉小学校 教諭 河 口 雅 史

キーワード：在外教育施設、オランダ、多様性、セクシャルマイノリティ、保健、道徳

1. はじめに

日本は高い教育水準にあると言われているが、こと性教育に関しては「最後進国」と言っても過言ではない状況に在る。ユネスコは、WHO（世界保健機関）などとも連携しながら、世界中の性教育の調査を行った結果、「包括的な性教育」は、若年層の性行動を早めることはないばかりか、性行動をより慎重化させると結論付けた。ところが、日本では、いまだに性教育を積極的に推進する姿勢が見られず、「性」について語ることや、その行為を恥ずかしがったり、タブー視したりする風潮が残っている。「性」については、人生に関わる大切なこととして、正しい知識をしっかりと教えたり、考えさせたりするべきではないだろうか。子どもたちを性から遠ざけるのではなく、性と真摯に向き合わせる必要があると考える。さらには近年、LGBTをはじめとするセクシャルマイノリティの割合は13人に1人といわれ、性の多様性についても学ぶ必要がある時代となった。文部科学省は、2015年4月30日に、性的マイノリティ（LGBT）の子どもへの配慮を求める通知を全国の国公私立の小中高校などに出している。しかし、学習指導要領には、LGBTに関する内容は明記されていない。私は、初等教育からセクシャルマイノリティについて学習する授業を行うべきだと考える。

2. オランダに学ぶ

虹色は、Lesbian、Gay、Bisexual、Transgenderの頭文字を並べたLGBTのシンボルカラーである。オランダの街を歩いていると、虹色のフラッグや虹色の横断歩道を見かけることがある。特にユトレヒトは、オランダで初めて虹色の横断歩道をつくった街であり、市役所に男女共用トイレの導入をしたり、同性愛カップルを象徴した特別な歩行者用信号機も導入したりしている。男女共用トイレの導入は、性転換者がより快適に使用できることが目的とされている。また、歩行者信号機には、2人の女性と2人の男性がそれぞれに手をつないでいる様子が示されている。ユトレヒトの広報は、「信号機で世間の人々の同性愛者へのイメージが変わるとは期待をしていないが、ユトレヒトが多面性、様々な立場の人びとを支持していることを世界に表明したい」と述べている。このユトレヒトの街に代表されるように、オランダは、世界で初めて同性愛者の権利を主張する団体が設立された国であり、同性婚を認めた国でもある。オランダの教育・社会事情を発信し続けるリヒテルズ直子氏によれば、オランダ人のアイデンティティの基盤は、自由・デモクラシー・法治・平等・寛容にあるという。マイノリティを含む、個のアイデンティティを保障することそのものが、オランダ人の国民的アイデンティティだということだ。そのオランダでは、2012年に、初等教育（4－12歳）・中等教育（12－16歳）・中等職業専門学校（16－20歳）及び特殊教育（初等～中等）の学校で、性教育及び、性の多様性についての教育（性的マイノリティの受容に関する教育）を行うことが義務付けられた。

一方、日本でも1990年のWHOの見直しを受け、同性愛はいかなる意味でも治療の対象とならないことが1994年に宣言された。現在は、アイデンティティの1つとして捉えられている。また、平成27年11月には、東京都渋谷区は同性カップルを結婚に相当する関係と認める「パートナーシップ証明書」の発行を始めた。世田谷区、三重県伊賀市、兵庫県宝塚市、沖縄県那覇市においても、同性パートナーのための取り組みが広がっている。しかしながら、日本では、まだ多くのセクシャルマイノリティの人々が生きづらさを感じている。カミングアウトにはハードルが高いのが現状であり、日本労働組合総連合会が実施した「LGBTに関する職場の意識調査」によ

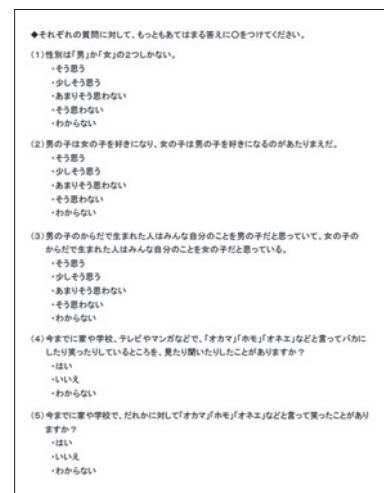
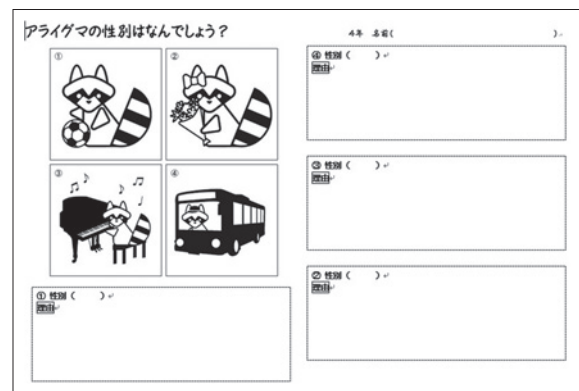
ると、職場に同性愛者や両性愛者がいることに抵抗を感じる人は、3人に1人というデータがある。これらの状況を鑑みたとき、初等教育の段階からセクシャルマイノリティについて学ぶことは、性に対する偏見のない社会をつくる上で、非常に重要であると考えます。そこで、ロッテルダム日本人学校の4年生を対象に、「保健」と「道徳」の授業を通して、セクシャルマイノリティについて考え、学ぶ授業を行った。

3. 保健の授業

小学4年生の保健の授業で、性について学習するが、それは「男」と「女」であって、その他の性については一切触れていない。そこで、この性について学習するタイミングで、セクシャルマイノリティについての基礎的な知識を学習する時間を設定した。教材は、LGBTを含めた全ての子どもが、ありのままの自分で大人になれる社会を目指す認定NPO法人ReBitが作成した動画とワークシートを用いた。子どもたちの考える「男らしさ」と「女らしさ」をマインドマップに表した後、動画を視聴し、性は単純に男女に分かれるわけではなく、「こころの性」「からだの性」「好きになる性」「表現する性」、それぞれで考える必要があることや、セクシャルマイノリティの人たちの一部を総称してLGBTと呼ぶことを学習した。この後に、自身がLGBTであることを公表している日本の芸能人を紹介し、「からだの性」については、生物学的にも男女に大別されるものの、「こころの性」「好きになる性」「表現する性」については、「両方」「中間」「どちらでもない」ということがあり、性は多様で一人ひとり異なることを学習した。

＜児童の学習感想より＞

- ☞ 女の人か男の人でも、なにが女子らしさで、なにが男子らしさとかは、決まらないことがよくわかりました。
- ☞ 性は性でも、いろいろな性があるとは思いませんでした。日本にもいろいろな性があることにおどろきました。
- ☞ LGBTのようなむずかしい言葉があるのは知らなかったので、すごいと思いました。
- ☞ わたしは、女の人が男の人になるや、その反対ぐらいしかないと考えたけれど、こんなにいっぱい種類があったり、名前があるなんておどろきました。そういう人たちを今度調べてみたいです。
- ☞ ぼくは、見た目は男だけどこころの性が女など、いろんな人がいることがわかりました。
- ☞ わたしは、LGBTを知らなかったのが、今日知れてよかったです。手術をしてまでもかわりたい人がいるんだなと思いました。
- ☞ 見た目は男でも、心は女。逆に見た目は女でも心は男の人もいるんだなって思いました。
- ☞ いろいろな性があることがわかりました。そして、人によって、その人の判断で、男か女になることがわかりました。
- ☞ 女の人と男の人はみんないろいろな性別があることがわかりました。



4. 道徳の授業

まずは、オランダという国が、LGBTなどの多様性を寛容的に受け入れている様子を写真で紹介した。一方、日本はどうだろうか。子どもたちに問いかけた後、子どもたちに紹介したい1人の日本人がいることを伝え、映像を流した。映像は、NHK（Eテレ）の「ウワサの保護者会」で第15回に放送された「どう向き合う？セク

シャルマイノリティの子どもたち」から抜粋した。からだは男の子だけど、こころは女の子だという、幼稚園年長の「みっちゃん」は、幼い頃から可愛いものが好きで、男の子のものには興味を示さなかったという。男の子の玩具を勧められるのが嫌で、ある日電車を選ばせようとしたお父さんに対して、泣き崩れ「分かってください！みっちゃんは可愛いのが好きだから！お願いします！」と言ったそうだ。そして、この映像が終わった瞬間に、「みっちゃん」がこの4月、ロッテルダム日本人学校に入学するということを伝えた。もちろん嘘であるが、子どもたちがセクシャルマイノリティと真剣に向き合い、自分事として考えるための手立てである。子どもたちの反応は、素直に驚く子もいれば、本当に入学するのか怪しんでいる子もいた。本当に入学してくることを考えると、「みっちゃん」が安心して生活を送ることができる学校にする必要があると、トイレや更衣室の使い方、男女に分けない並び方、性別を書く際には男女に分けない、ポスターを作って学校のみんなに知らせるなど様々な意見が出た。

＜児童の学習感想より＞

☞ オランダのユトレヒトは、LGBTの人がすごしやすくしていてすごいと思いました。ユトレヒトという市は、LGBTの人に対していろいろな協力をしていておどろきました。また、オランダに来たとき、改めてLGBTの人のためにどんな協力をしているのか見てみたいです。

☞ 13人に1人なんておどろきました。そして、そんなに苦しんだり、なやんでいるひとがいるなんておどろきました。これからもそういう人がいたら、「どうしたの？」と聞いて、相談にのってあげたいです。ユトレヒトの人は色々工夫しているなんてびっくりしました。

☞ 人を見た目ではんだんするのはよくなく、LGBTかどうか聞くのが大切ではないかと思いました。

☞ わたしは、LGBTのことについて知らなかったので、保健で書いたアンケートを変えたいと思います。ユトレヒトにLGBTの人のためにできているトイレがあるなんて知りませんでした。つくった人は、親切だなと思いました。

☞ わたしは、アンケートの「(2) 男の子は女の子を好きになり、女の子は男の子を好きになるのがあたりまえだ」で、「そう思う」にまるをつけたけれど、男の人が男の人を好きになってもいいと思った。なぜなら、人は一人ひとり好きな人や、愛する人はちがうから。

☞ 私は、LGBTを見たことがなかったので、最初はとてもびっくりしたけど、あとから先生が説明してくれたのでよく分かりました。これから、LGBTの人に会ったら、やさしくしたいと思いました。

☞ わたしは、100人に1人ぐらいLGBTの人がいると思ったけど、13人に1人ぐらいだなんて初めて知って、おどろきました。もし、この学校や、こんど行った学校とかでLGBTの子とかがいたら、今日やったことを先生とかに言って、LGBTの子たちが安心して過せるような学校づくりをしたいです。

☞ もしもロッテルダム日本人学校に来たら、みんなでいい取り組みをして、LGBTの人たちをささえてあげたいです。それに、日本の人たちもそういう取り組みをしてほしいです。

☞ ぼくは、LGBTを知りませんでした。ぼくは、ニュースでにじいろのはたを見たことがありました。けれど、その時は、意味がよくわかりませんでした。今は、いろいろな色の性があるとわかってよかったです。

5. 最後に

現在、日本の学校では、子どもたちを誰でも「さん付け」で呼んだり、名簿を男女別に分けないようにしたりという取り組みが行われているが、学校から言われてやるのと、自分たちで考えてやるのでは、必要感や切実感に大きな差があるはずである。今後、セクシャルマイノリティの子が身近な存在になったとき、子どもたちはどう接するのか。真価が問われるのは、まさにその時であり、この授業で学んだことが少しでも生きることを願わずにはいられない。